オレンジだより

教師のための
発達心理学

①

乳幼児期における遊びと発達

2011.5.11.

「遊び」とは何か

(1) 「遊び」の特徴

「遊び」とは複雑で多様なものである。ブロック遊びやままごと、追いかけっこなど、私たちは子どもが遊んでいる場面を頻繁に目にするが、改めて「遊びとは何か？」ときかれると言葉につまる人も多いだろう。高橋（一九八四）は、遊びの特徴を次のようにまとめている。

①遊びは自由で自発的な活動である
②遊びは面白さ・楽しさ・喜びを追求する活動である
③遊びにおいてはその活動自体が目的である
④遊びはその活動への遊び手の積極的なかかわりである
⑤遊びは他の日常性から分離され、隔絶された活動である
⑥遊びは他の非遊び的活動に対して、一定の系統的な関係をもつ

(2) 遊びにおける自発性と好奇心

内発的で自発的な活動である遊びは、好奇心によって開始される。「子どもは遊びの天才」と言われるのは、「なぜ？」「どうして？」「どうなるの？」といった好奇心にあふれた子どもにとって、好奇心を刺激する環境のすべてが遊びへと展開されうるためである。では、子どもの好奇心はどのようにして育つのだろうか。

桜井（一九八七）は、幼児が好奇心を発揮するメカニズムについて検討し、他者からの受容感が子どもの有能感を高め、好奇心行動（おもに探索行動）が促進されることを明らかにした。すなわち、他者から受け入れられている安心感と自分に対する自信をベースに、子どもの好奇心は広がっていくのである。石崎（二〇一〇）は、好奇心を育てるためのおとなのかかわりにおいて、次のような配慮が必要であるとしている。

①好奇心と、それに伴う興味、驚き、不思議といった情緒を大切にし、答えをすぐに与えるのではなく、その気持ちに共感して一緒に面白がる。
②好奇心が喚起されるような豊かな体験の場や、感情が揺さぶられる機会を用意する。
③子どもの理解の仕方はおとなのそれとは異なることを理解し、おとなから期待される答えを一律に与えるのではなく、個々の発達に応じた手助けをする。

一方で、自発的な活動であるはずの遊びにおいて、「いつ・どこで・何をして遊ぶかを自分で決められない」といった、遊びにおける自発性の低下が指摘されている。この理由の一つに、遊び方が限定されるような特殊化された玩具の出現や、おとなによる遊びの過

度なコントロールがあげられる。遊びが前もって提供される機会の増加によって、子どもは自分で遊びを創造するのではなく、他者（玩具・おとな）から遊びの楽しみやルールが与えられるのを期待し、待つようになる。結果として、遊びの自発性は減少すると考えられる。子どもの発達における遊びの重要性が指摘される中、「発達を促進させる遊びをさせたい」「質の高い玩具で遊ばせたい」と考えるおとなも少なくないだろう。もちろん、遊びを大切にすることは重要であるが、それが行き過ぎると自発性を低める可能性があることに留意したい。

乳幼児期における遊びと発達

子どもの発達における遊びの意義は広く知られている（表1）。発達を基盤に遊びが行われ、また、遊びによって発達が促されると言える。

(1) 認知観点から見た遊びの発達

乳幼児期の遊びの発達を認知的観点から研究したピアジェ（一九六二）は、遊びを機能的（感覚運動的）遊び、象徴遊び、ルールのある遊びの三つに分類した（表2）。認知的発達とともに遊びも発達すると言える。

(2) 社会性の観点から見た遊びの発達

パーテン（一九三二）は、遊びを社会的行動ととらえ、社会性の観点から遊びの発達を明らかにした（次ページ表3）。二歳代ではひとり遊びや平行遊びが多く、仲間とともに遊

表1　遊びの意義（佐々木、1997）

意　義	内　　容
身体的意義	身体・運動機能の発達
認知的意義	①創造性・想像性の発達 ②言語能力の発達 ③比較、判断、類推に関する能力の発達
社会的意義	①競争、協調、譲り合い、助け合い、連帯感、自己主張など社会性の発達 ②善悪の判断、思いやり、正義感など道徳性の発達 ③友だちと自分を比較したり衝突することによる自我意識の発達
情緒的意義	欲求不満耐性の獲得や自由な感情表現
治癒的意義	抑圧された感情や願望の表出による、精神的健康の維持・回復

表2　認知的発達とピアジェによる遊びの発達（ピアジェ、1962）

	認知的発達		遊びの発達	
～1・2歳	感覚運動期	直接的な動作によって外界と関わり適応していく段階。 触る、叩くなど、対象に対する直接的な働きかけが繰り返される中で、自分の身体の感覚や運動によって直接もたらされる認識は、次第に心の中でのイメージ（心的表象）へと育っていく。	機能的（感覚運動的）遊び	指を吸う、ガラガラを鳴らす、興味のある物を口に入れるなど、運動そのものを楽しんだり、身体や感覚の機能を使って自分や外界の変化を楽しむ遊びが行われる。象徴遊びへの移行を示す兆候として、延滞模倣（母親のやったことをあとでマネする）や、ふり遊び（小さな箱を車に見たてて遊ぶ）などが見られる。
2～6歳	前操作期	目の前に存在しない対象や事象を頭の中にイメージとして思い浮かべられるようになり（表象作用）、言語の組織的習得が始まる段階。	象徴遊び	ままごとなどのごっこ遊びが行われる。石ころを「おにぎり」として食べるふりをしたり、あるキャラクターやヒーローになったつもりで遊ぶことができる。
6～11歳	具体的操作期	領域に固有的で、目の前に具体的対象物がある場合に限られるが、「みかけ」に左右されることなく2つ以上の次元を同時に考慮しながらの心的操作が可能になる段階。	ルールのある遊び	トランプやサッカーなど、ルールのある遊びが行われる。 ルールのある遊びが見られてくると、機能的（感覚運動的）遊びや象徴遊びは減少する。
11歳～	形式的操作期	仮説に基づいた論理的操作や、命題間の論理的関係についての理解が可能となる段階。現実の世界に対してだけではなく、可能性の世界についても論理的に思考できるようになる。		

表3　パーテンによる遊びの分類と発達（パーテン、1932）

分　類	内　　容	年　齢　差
専念しない行動	興味をもったものをじっと見ていることもあるが、そうでないときは、ぼんやり立っていたり、部屋の中をちらちら見ながら座っている。	2～3歳の年少の子どもにのみ見られる。
ひとり遊び	他の子どもと話ができる距離にいるが、近くにいる子どもとは違う玩具で、ひとりで独立して遊んでいる。他の子どもに近寄ったり、話しかけることはなく、自分の遊びに専念している。	2歳半で最もよく見られるが、3歳さらに4歳になると減少する。
傍観者遊び	ほとんどの時間を他の子どもたちが遊ぶのを見て過ごす。観察している子どもたちに話しかけたり、質問することもあるが、明らかに遊びの中に入っていない。「専念しない行動」との違いは、特定のグループの子どもたちを観察していることである。	2歳半～3歳で最もよく見られる。
平行遊び	ひとりで遊んでいるが、他の子どもたちの近くで、同じような玩具で遊んでいる。しかし、他の子どもの遊びには関心を示さず、自分の遊びに夢中になりひとりで遊ぶ。	2歳で最も多く、3～4歳で最も少ない。
連合遊び	集団遊びの一つ。共通の活動、興味があり、玩具の貸し借りや遊びに関する会話がある。遊びの役割分担や組織化は見られない。	年長になるに従って増加する。
協力遊び	組織化された集団遊び。リーダーがいて役割分担したり、組織化されたグループの中で遊ぶ。ある物を作ろうとか、あることを達成しようとする目的がある。	3歳から顕著に増加する。

ぶことは少ない。しかし、二歳半から三歳で傍観者遊びが最も多いことから、この年齢の子どもたちは、他の子の遊びには参加していないが、他児の活動に興味をもちはじめていることがうかがえる。三歳以降になると連合遊びや協力遊びが増加する。これは、集団の活動に参加するためのスキルの獲得や、協力遊びに必要な言語的能力の発達に伴うものであろう。このように、乳幼児の遊びは、自分ひとりでの遊びから、仲間の遊びの観察を経て、共通のルールや目的をもった遊びへと発達するのである。

「ひとりで遊ぶ子」をどのように理解するか？

幼稚園の自由遊び時間にひとりで遊んでいる子を見ると、「発達が遅れているのではないか」「社会性が低いのではないか」と不安になる人も多いだろう。もちろん、幼児期における仲間との遊びは重要であるが、近年では、ひとり遊びが必ずしも発達的な遅れや不適応を示すものではないことが明らかになっている（Moore et al., 1974）。では、「ひとりで遊ぶ子」をどのような観点から理解したらよいのだろうか。

(1) ひとり遊びの内容

ムーアら（一九七四）は、幼児のひとり遊びの内容を検討し、ひとり遊びの中には読書やパズルなどの知的・教育的な遊びや、描画やブロックなどの目標志向的な遊びが含まれており、必ずしもひとり遊びが発達レベルの低いことを意味するのではないことを明らかにした。このことからもわかるように、「何をして遊んでいるか」という観点から見ることが重要である。

(2) ひとり遊びの見られる時期

だれにとっても新しい環境となる入園直後のひとり遊びと、安定した仲間関係が形成される時期のひとり遊びとでは、その意味が異なる。大内・櫻井（二〇〇八）は、ひとり遊びの内容と問題行動との関連を縦断的に検討し、入園直後に傍観者遊びが多い場合であっても長期的な社会的不適応にはつながらないが、仲間関係が安定した時期に構成的遊びや探索的遊びなどのひとり遊びが多い女児の場合は、その後の不注意・多動や攻撃行動といった問題行動が多いことを明らかにした。ひとり遊びが見られる時期によっては、子どもへの早期の対応が求められるだろう。

(3) 社会的スキル

仲間と関われるけれどもひとりで遊ぶのが好きな子どももいれば、仲間と関われないために（結果的に）ひとりで遊ばざるをえない子どももいる。後者の場合は、友だちとの友好な関係を開始・維持するための社会的スキルを考慮する必要があるだろう。特に、友だちを遊びに誘うといった主張性スキルは、幼

児の仲間関係においては大きな役割を果たしており、このスキルが低い子どもは仲間に入れず孤立する可能性がある（大内・櫻井、二〇〇八）。子どもが社会的スキルを獲得していないのであれば、社会的スキルトレーニング等の方法を用いてこれらを学習する機会を提供する必要がある。また、社会的スキルは獲得しているが何らかの理由によってそれを発揮できないのであれば、社会的スキルを行使しやすい環境を整えることが大切である。なお、引っ込み思案で孤立しがちな幼児の社会的スキルトレーニングについては、佐藤・佐藤・高山（一九九三）によって検討がなされているので、そちらを参照されたい。

(4) 認知スタイル

認知スタイルとは、人間の情報処理過程において見られる、比較的安定した情報処理様式の個人差のことである。この認知スタイルの一つに、「場独立／場依存」がある（Witkin et al., 1972）。場独立型の人は自分でつくり出した手がかりに反応する傾向が強く、場依存型の人は外的な手がかりに依存しがちである。遊びとの関連で見ると、場独立型の子どもはひとりで遊ぶことを好み、ときおり仲間と相互交流はするものの仲間から独立して活動することが多い。一方、場依存型の子どもは社会的な遊びを好み、仲間と協働的に遊ぶことが多いことが示されている（Coates, 1972）。それぞれの認知スタイルによって、遊びの好みが異なっているのである。

入園初期など、子どもがその環境に慣れていない時期には、子どもの認知スタイルにあった遊び経験を提供することが大切である。その後、子どもがある程度安定して遊べるようになったら、各自の認知スタイルとは異なる遊びにチャレンジできるよう支援することも必要であろう。場独立型の子は非社会的な遊びから始め、徐々に社会的な遊びも経験することで、社会的スキルや社会的な感受性を高めることができるだろう。一方、場依存型の子は社会的な遊びから始め、徐々に、物事の分析や認知的な再構築といったスキルの必要となるひとり遊びに挑戦してみるのもよいだろう。

(5) その他の発達指標

表2に見られるような認知的発達に伴い、言語でのコミュニケーションや、仲間との遊びイメージの共有が可能となる。子どものさまざまな発達的特徴を理解することも必要である。

このように、「仲間と遊んでいるか、ひとりで遊んでいるか」という観点からだけではなく、多方向からひとり遊びをとらえることが重要である。そのためには、ふだんから子どもをよく観察し、子どもの特徴を把握しておくことが必要であろう。

文献

・Coates, S. 1972 *Preschool Embedded Figures Test.* Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.
・石崎一記「情緒と欲求」櫻井茂男・岩立京子（編）『楽しく学べる乳幼児の心理』福村出版、六五～七八頁、二〇一〇年。
・Moore, N. V., Evertson, C. M., & Brophy, J.E. 1974 Solitary play: Some functional reconsiderations. *Developmental Psychology*, 10, 830-834.
・大内晶子・櫻井茂男「幼児の非社会的遊びと社会的スキル・問題行動に関する縦断的検討」教育心理学研究、56、三七六～三八八頁、二〇〇八年。
・Parten, B. M. 1932 Social participation among pre-school children. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 27, 243-269.
・Piaget, J. 1962 *Play, dramas, and imitation in childhood.* New York: Norton.（大伴茂（訳）、『遊びの心理学』同文社、一九六七年。）
・桜井茂男「幼児における受容感と有能感と知的好奇心の関係」日本教育心理学会第29回総会発表論文集、八三二～八三三頁、一九八七年。
・佐々木晃「遊びの発達」新井邦二郎（編）『図でわかる発達心理学』福村出版、一九九七年。
・佐藤正二・佐藤容子・高山巌「引っ込み思案幼児の社会的スキル訓練―社会的孤立行動の修正―」行動療法研究、19、一～十二頁、一九九三年。
・高橋たまき『乳幼児の遊び―その発達プロセス』新曜社、一九八四年。
・Witkin, H. A., Lewis, H. B., Hertzman, M., Machover, K., Meissner, P. B., & Wapner, S. 1972 *Personality through perception.* Westport, CT: Greenwood Press.